

共同助成(札幌方面遊技事業協同組合)

「共生の舞台『ふれあいまつり』」事業

障がいを持つ人と健常者が太鼓を叩きながら 共生・共創の舞台をつくる貴重な取り組み

かつては中学校の体育館だった会場で、太鼓を打つ音が身体に直に響いてくる。障がいのある人だけによる活動ではなく、健常者も一緒になって活動することで、地域の未来づくりにもつながるのではないか。アートの持つ力を通してインクルーシブな社会を創造するための取り組みを北の大地で実践してきた。



障がい者に対し、和太鼓のワークショップを開催



新型コロナで孤立を深める障がい者を 中心に和太鼓のワークショップを開催

北海道・滝川市に拠点を置くNPO法人「アートステージ空知」は、障がい者と健常者が互いの理解を深め、一つのことを協力して成し遂げるための共生の舞台をつくることを目的に活動を続けている。

同法人は「鑑賞」と「創造」を両輪とする事業に取り組んでいるが、鑑賞事業としては会員のアンケートに基づいて希望に沿った公演を年6～10本ほど、創造事業としては地域にゆかりのある文化人の公演のサポートやアマチュア创作者のバックアップなどをはじめ、年1～2本の公演を行っている。

2013年から、同法人では金沢や東京などで活動する演出家を招聘し、北海道・深川市の障がい者福祉サービ

ス多機能型事業所「深川ディスプレイスふれあいの家」の利用者とともに、コンテンポラリーダンスや演劇などのワークショップ、舞台公演を開催してきたが、2019年からは和太鼓奏者のしんたさんを招聘し、ワークショップや舞台公演に取り組んでいる。その活動を継続するなかで、滝川市や雨竜町などにある福祉施設・学校などからも参加希望があり、障がい者団体やサポート団体など計5団体、総計150名の方々から支援を受けるようになってきた。

空知総合振興局管内には約2,000名を超える障がい者がいるが、新型コロナの感染拡大によって、施設に通えない、孤独を感じている方が多くいる。そうした状況を踏まえ、同法人では感染予防をしながら、和太鼓のワークショップや舞台公演を実施することにした。

障がい者と健常者が同じ舞台に立ち 太鼓の演奏を披露する催しが大盛況

ワークショップには、滝川市の社会福祉法人「ほほえみ工房」、深川市の太鼓サークル「夢ファミリー」、雨竜高等養護学校の通所者や通学者が参加し、2021年5月から11月にかけて計12回にわたって行った。太鼓サークルと支援サポート団体による合同ワークショップでは、最初は障がい者が気後れして一歩下がる感じだったが、時間が経つにつれてお互いが笑顔になり、教え合う姿も見受けられた。

その成果を披露する場となったのが、2021年11月14日に深川市学びと交流の郷音江広里交流館エフパシオで開催された「共生の舞台『ふれあいまつり』」であった。10回目となる「ふれあいまつり」だったが、会場には出演した障がい者62名、支援スタッフ57名、観客266名の総385名が詰めかけ、大盛況だった。

「コロナ禍で障がい者が引きこもりがちになるなか、ワークショップを開催できたことに関係者一同が安堵の気持ちになるとともに、太鼓の持つ力に改めて感銘を受けた公演でした。最初は障がい者を「見守る=待つ」体制からスタートしましたが、今回は一緒にワークショップを受け、一緒に舞台上がり、共通の目的や目標に向かってお互いの信頼関係を築くという、文化庁も推進しているインクルーシブ教育の実践の機会になりました。また、障がい者のご家族や地域も含め、一つのコミュニティ=ネットワークづくりを目指す第一歩となりました」と同法人の担当者は、その手ごたえを語った。

札幌方面遊技事業協同組合より

障がい者と健常者の垣根を低くする取り組みが、今後のコミュニティづくりにもつながると思い、助成をしました。



障がい者と健常者が一緒に和太鼓を披露した「共生の舞台『ふれあいまつり』」



助成団体:特定非営利活動法人 アートステージ空知

<http://sorachionkan.blog69.fc2.com>



出演者たちがいい笑顔でいたことが一番うれしかったこと

助成を受けられると聞いたとき、これで本当にこの事業を実施できるという安堵感がありました。もしPOSCや札幌方面遊技事業協同組合の助成がなければ、法人として予算変更をし、財源を確保する必要があるだけに助かりました。この助成を受けることができ、文化庁が推進するインクルーシブ教育に向けて一歩、前進できました。

特定非営利活動法人 アートステージ空知
理事長 青木 勝美さん